

【第1講】

書くことの難しさに気付くことが全ての始まりです。

明細書を書いたことが無い人は「日本人が日本語の文章を書いて、それを日本人が読むのだから、意味が伝わらない筈が無い」と思うものです。でも、それは全く成り立ちません。「どう成り立たないのか」「なぜ成り立たないのか」に気付くことが、明細書を「どのように書けばよいのか」を知るための全ての出発点になります。

文章が伝わらない理由は、大きく3つありますが、そのうちの1つは、そもそも「言葉」は何かを正確に記述する機能を持っていないからです。ここで言う「言葉」とは、コンピューター言語や数式を除いた言葉（いわゆる自然言語）を指しています。「そんな筈はない。実際、言葉を使って意思を疎通し合いながら仕事や生活しているじゃないか」と思うかもしれません。しかし、例えば、これまで見たことがないような（動物なのか植物なのかも分からないような）奇怪な生物に遭遇したとして、その生物のことを言葉で説明する場面を想像してみてください。たちまち言葉の無力さに気が付く筈です。また、頑張っ言葉で説明しようとする「まるで〇〇〇のような」というフレーズを多発することになると思います。つまり、「〇〇〇」と言えば、そのイメージは相手に伝わるので、その〇〇〇という既存の単語に全面的にすがりつかざるを得ない状況になるのです。ですから、普段の仕事や生活での言葉による意思疎通は、おそらく8割程度は、既存の単語を相手に示すだけで済んでしまっているのです。簡単に言うと、「今度、〇〇〇だよ。」「分かった。〇〇〇だな。」という感じで、特に目新しいことを伝えあっているわけではありません。普段の言葉による意思疎通は、かなりの部分が、既存の単語を相手に示しているだけに過ぎず、実際には言葉で（つまり、単語を組合わせて用いることで、それら単語の持つ意味を超えた何かを表現して）意思疎通しているわけではないのです。

ところが、既存の単語で伝えられる部分の割合が小さくなってくると、たちまち言葉の無力さを思い知ることになります。そして、残念なことに、特許明細書の世界は、既存の単語で伝えられる部分の割合があまり大きくありません。その結果、言葉の無力さを日常的に思い知らされながら、それでも言葉を使って何かを表現しようと努力することになります。特許明細書を書くという仕事は、そういう仕事です。

文章が伝わらない2つめの理由は、読んでいる側が質問できないからです。この理由は直ちに納得して貰えると思います。口頭で説明する場合は、相手の反応を見ながら、補足説明を加えたり、説明の仕方を変えてみたりすることができるので、取り敢えず説明を始めてもほとんどの場合が事足ります。

しかし文章の場合は、読んでいる途中で理解できなくなると、それ以降の説明は全て無駄になってしまいます。あるいは、読んでいる途中で内容を誤解してしいると、しばらくは読み進めることができますが、ある所で全く分からなくなってしまう。この場合、何処で誤解したのかは分からないことが普通なので、何処から読み直せばよいかも分からないという（読む側にとって）最悪の事態となってしまいます。だからといって、あまりに説明が丁寧すぎると、今度は読み手に読み飛ばされてしまい、その結果、ある所でやっぱり分からなくなってしまう。このように、読み手が質問できない状況で抽象的な何かを伝えると言うことは、実はもの凄く難しいことなのです。

文章が伝わらない3つめの理由は、どうしても余計なことを書いてしまうからです。口頭で説明する場合は、取り敢えず説明を始めてみて、説明しているうちに（場合によっては質問に答えているうちに）説明するべき内容がハッキリしてきたという経験が、誰にでも有ると思います。説明するべき内容がハッキリしてきた段階で、もう一度初めから説明し直せば、説明の仕方は随分と違ったものとなるでしょう。つまり、説明するべき内容がハッキリしてくるまでの間は、あまり関係の無いこともたくさん説明していたこととなります。

口頭で説明する場合は、説明するべき内容が最終的にハッキリしさえすれば、特に大きな問題は生じません。聞いている相手は、話しぶりから「初めの方はあまり関係が無いので無視しても良い」とか、「この内容が本当に説明したかったことだな」ということを察知してくれるので、説明するべき内容がちゃんと相手に伝わります。

ところが文章では、読み手がこれらを察知してくれることはほとんど期待できません。従って、あまり関係の無いことを書いてしまうと、（関係が無いことを察知することができないので）読み手は大きく混乱してしまいます。従って、文章で説明する場合は、初めから無駄の無い状態で（ちょうど、口頭で取り敢えず説明を始めてみて、説明すべき内容がハッキリしてきたので、もう一度初めから説明し直す場合のように）説明しないといけないのです。

そして、実に困ったことに、文章では読み手の反応や質問が帰ってこないで、説明している間に、説明すべき内容がハッキリしてくることをほとんど期待できません。その結果、初めから終わりまで、あまり関係の無いことを書いてしまい、そのくせ、肝心な内容は何となくしか書けていない（そうなっていることにすら気が付かない）という事態になり易いのです。これが、余計なことを書いてしまう原因です。